

3. 資本主義と 私的所有のゆらぎ

ゆらぎの基礎の基礎

今回のキーワード

- ⊕ 市場社会vs.資本主義社会
- ⊕ 企業社会＝従業員社会
- ⊕ 私的所有vs.社会的労働
- ⊕ 私的所有のゆらぎ
- ⊕ 不労所得

今回の課題

- ✓ 資本主義社会と市場社会との関係を復習する。
- ✓ “自己労働に基づく私的所有”という市場社会の正当化原理の観点から、最も単純な資本主義社会を検証する。

今回の内容

- ▶ 市場社会と資本主義社会
(政治経済学1の復習を兼ねて)
- ▶ 生産物・利潤・資本の所有は
自己労働に基づいているか？

1. 資本主義社会

市場社会と資本主義社会

1.1 物件のシステムとしての 資本主義社会

現代社会の決定的特徴

- 財貨・サービスが商品として生産・流通
 - 価値の生産
 - 市場社会
- しかも、営利企業によって生産・流通
 - 価値の増大（利潤）
 - 資本主義社会

市場社会から資本主義社会へ

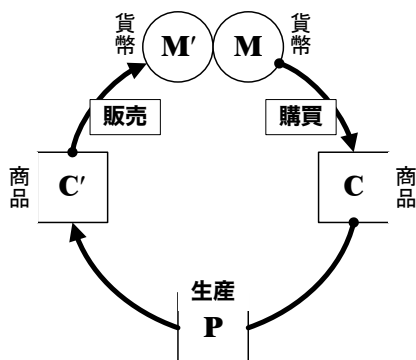
- 市場社会
 - 経済活動の表面に着目して現代社会をつかまえた
 - オープンな社会的場面
 - 誰でも飛び入りOK
 - 商品と貨幣のシステム
- 資本主義社会
 - 企業の中に入って現代社会をつかまえる
 - クローズドな私的領域
 - 関係者以外立入禁止
 - 資本のシステム

資本のイメージ

- 資本主義社会と言うからには資本が問題
 - 資本のいろいろなイメージ
 - 企業、会社、生産手段、会計上の資本など
 - 資本の共通のイメージ＝カネモウケ

資本の回転運動

- 倒産しないかぎり、終わることができない無限運動
- Going Concern



モノ（＝物件）のシステムの自立化

- 資本家（＝人格）が死んでも、他人に企業資産を売却しても、
- 資本（＝物件のシステム）は存続する。

1.2 資本主義社会のメインプレイヤー

賃金浪々社と資本主義的営利企業

プレイヤーの行動原理

- 市場社会
 - 価値の節約（マイナス）。
 - 損をしない。
- 資本主義社会
 - 価値の増大（プラス）。
 - 儲ける。

メインプレイヤー（1）：企業

- 商品生産者の二つの種類
 1. 資本主義的営利企業
 - 多数の従業員を雇用する
 2. 自営業者（すなわち個人）
 - 従業員を雇用せずに自ら働く
- メインプレイヤーは資本主義的営利企業
 - = 《資本》を物件の現実的運動に即してとらえたもの
 - ※ 労働者も労働者間での組織も資本主義的営利企業という物件の内部ではこの物件を構成する要素にすぎない

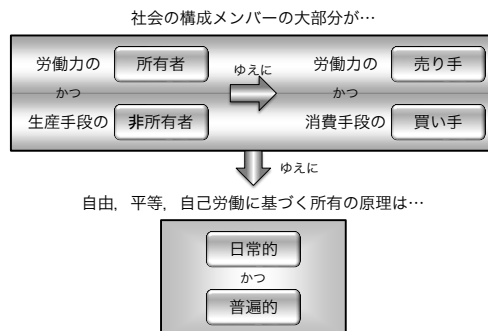
企業の二つの種類

- 企業の二つの種類
 - 資本家（＝出資者・私的所有者）の違い
- 1. 個人企業
 - = 自然人としての個人が資本家である
- 2. 会社企業
 - = たくさんの資本家が結合している
 - 合資会社
 - 合名会社
 - 株式会社

メインプレイヤー（2）：賃金労働者

- その存在条件
 1. 生産手段をもっていない（非所有者）
 - ≠ 企業・自営業者
 2. 労働力をもっている（所有者）
 - ≠ 奴隷
- 労働力を時間ぎめで販売する
- 自由・平等な私的所有者

従業員社会の歴史的意義



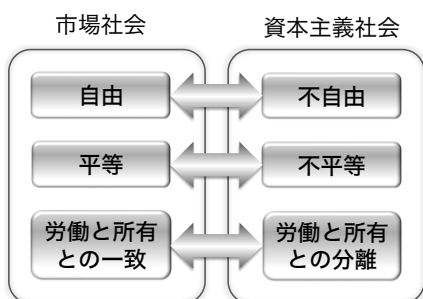
市場社会と資本主義社会との関連

- 資本主義社会は市場社会の成立によって初めて発生する。
 - 市場がなければ
そもそも労働力の売買なんてあり得ない。
- 市場社会は資本主義社会の成立によって初めて一般化する。
 - 社会の全構成員が私的所有者として
市場社会に参加する。

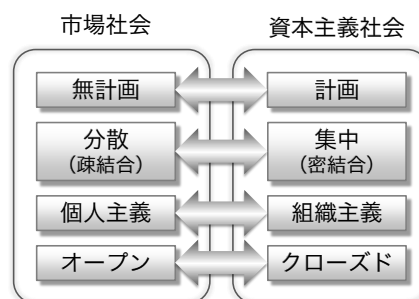
市場社会の担い手

- 市場社会の担い手（交換主体）は
 - 自立した私的個人
 - 抽象的には、私的所有者
 - 具体的には、売り手（商品所持者）と
買い手（貨幣所持者）
- 市場における生産・流通の現実の担い手（経営主体）は
 - 個人（自営業者）か組織（資本主義的営利企業）かを問わない
 - しかし市場の原理が想定しているのはあくまでも私的個人（自営業者）

市場社会vs.資本主義社会 (1) 個別的主体の原理



市場社会vs.資本主義社会 (2) 全体編成の原理



市場と資本主義との長所・短所

- 市場の原理を徹底すると...
 - 形式的な自由・平等・所有
 - 生産力は停滞
 - 自営業者だけではコスト切り下げに限界あり
- 資本主義の原理を徹底すると...
 - 実質的な不自由・不平等・非所有
 - 生産力は飛躍的増大
 - カネモウケという原理のおかげで
イノベーション

2. 私的所有と社会的労働

私的所有という制限

社会的労働の発展に対する 私的所有の制限

- 制限性：私的所有は、それ自体としては、自然人としての私的個人によって制限されている。
 - 市場は、社会からも互いからも分離された私的個人を想定する。
- 無制限性：社会的労働は、それ自体には、制限をもたない。
 - 資本主義は、価値増殖の無制限性という形で労働の無制限性を達成しようとする。

制限の現実化

社会的労働		私的所有	
有機的	弾力的	非有機的	非弾力的
	量的無制限		量的制限

有機性

- 社会的労働は有機的
 - 目的の性質に応じて、いくらでも変化することができる。
- 私的所有は非有機的
 - そもそも所有は法的・制度的であって、生産の変化に応じてreal timeかつflexibleに変化することができない。
 - しかも私的所有は私的個人としての私的所有者という単位によって制限されている

量的制限性

- 資本主義社会において、生産力の上昇にともなって、必要最低資本量も増えていく。
 - 社会的労働は量的無制限
 - そもそも個人の労働は有機的
- ⇕ これに対して
- 個人的な私的所有物（私有財産）の量は私的所有者個人によって絶対的に制限されている。

弾力性

- 恐慌
 - 市場の内部では、社会的労働の弾力的な減少に応じて、弾力的に私的所有物（＝資本）が減少するということができない。
 - 資本の価値破壊（稼働率低下・稼働停止・廃棄）という形でハードランディングするしかない。
- 資本の部門間移動
 - 個人的な私的所有の枠組みでは、社会的労働の弾力的な移動に応じて、弾力的に私的所有物（＝資本）が移動するということができない。

3. 私的所有の揺らぎ

最も単純な資本主義的生産における私的所有の正当性危機

最も単純な 資本主義	複雑な 資本主義
自己金融	社会からの融通
個人企業	会社企業 企業間関係

大前提

■ 賃金労働者の側での、
労働と所有との分離

● 賃金労働者が生産した生産物に対する
所有権は、すべて資本家に属する。

■ ただし、賃金労働者は、
自分が販売する労働力に対する
正当な対価を賃金として獲得する。

生産物の私有(1)——現実

■ 原因

● 労働力の用役権も生産手段も
資本家のもの

■ 結果

● 生産物も資本家のもの

生産物の私有(2)——理念

■ 市場においては、
生産物は、資本家という私的個人の
私的な自己労働に基づく私有財産
として現れるしかない。

⇧ しかし

■ 企業の中を見ると、
労働をしているのは従業員
(賃金労働者)。

利潤の私有(1)——問題

■ 生産物の売上高のすべてが
資本家の自由になるわけではない。

■ Going Concernとしての
資本主義的営利企業は、
生産手段にも労働力にも市場で
正当な対価を支払わなければならない。

■ 利潤こそが資本家の真の私有財産

利潤の私有(2)——弁明

■ “利潤の取得は資本提供に基づく。”

■ “資本は
自己労働によって取得されたものだ。”

■ “だから利潤の取得は
市場の原理（自己労働に基づく私的所有）
に即して正当だ。”

弁明の補足

- 私が自己労働に基づいて
資本の私的所有者になったのと同様に、
従業員も、一方で自己労働に基づいて
高い賃金を獲得し、他方で節欲し、
こうして剰余を蓄積すれば、
資本の私的所有者、つまり資本家にな
ることができる。
- つまり、能力の違い、運不運を前提した上で、
一方は頑張り、他方は怠けた結果として、たまたま現在、
資本家と労働者とが分かれている。

資本の私有(1)——仮定

- 自己金融
 - 内部留保で追加投資を行う
 - 銀行は存在しない
- 個人企業
 - 資本家が経営者
 - 株式会社も存在しない
- 元手（最初の資本）の所有は
自己労働に基づく

資本の私有(2)——結論

- 利潤の取得は自己労働に基づかない。
- 資本増大は利潤からの内部留保に基づく。
- 企業の資本が増大するのにつれて、
“自己労働に基づく最初の資本の部分”
が
総資本にしめる割合は
どんどん減少していく。
- 現在の資本の大部分については、
その所有は自己労働に基づいてはいない。

システムの必然性(1)

- 個々の偶然的なケースとしては、
一方では資本家が破滅して労働者に転落し、
他方では労働者が成功して資本家に上昇する。
- システム全体の必然性としては、
資本に対する私的所有は、自己労働に基づくか
どうか（頑張ったかどうか）から独立している。

システムの必然性(2)

- 一方では労働しない側（資本家）が、
自己労働しないのにもかかわらず、
ますます資本に対する所有を増やし、
- 他方では労働する側（賃金労働者）が
自己労働すればするほど、
自己労働を吸い取る資本という富を
増やしている（資本に対する所有から遠ざかる）。
- 市場社会が想定していなかった事態
 - システムが存続するために必然的に
資本というストックが
不労所得というフローを生み出し、
不労所得というフローを必要としている。

今回の結論

- ❖ 市場の原理と
資本主義的営利企業の原理とは異なる。
- ❖ 資本主義が利用する社会的労働の原理は
柔軟かつ成長指向、
市場が生み出す私的所有の原理は
固定的かつ制度的。
- ❖ 最も単純な資本主義社会を考えてみても、
私的所有の正当性は揺らいでいる。